南半球の旅

賈　晶淳

1 昨年のカナダ、昨年のアメリカに続き、休暇を使った 3 度目の今回の旅は香港、オーストラリアのシドニーとメルボルン、ニュージーランドのオークランド、ウェリントン、クライストチャーチを訪ね、町の姿や市場、博物館や美術館、動・植物園や国立公園などを見て回った。特に見どころは美術館で、しかも博物館など含め入場料が要らない。

今回の旅はレンタカーを借りずに徒歩と一般交通機関を使うことで新しい乗り物やそのシステムなども味わいながらのとても充実した旅であった。例えば、メルボルンはトラム(TRAM)という低床電車が街の縦横を始終走っているが、多くの路線を走っているため常に大勢の人で賑わう。利用客が多いもう一つの理由は碁盤のようにできている広い範囲の町の中心街を無料で乗り放題できることにある。殆どの町が交通カードで乗車券や乗務員もなく船や地下鉄、バスやトラムにも乗れて、ただ乗りも多いと思うが 1 度だけ交通カードをチェックされた。町と町の間の移動には昼間のバスや列車、フェリーを利用したがおよそ 9-12 時間を走る長旅であった。

ニュージーランドに渡った時のことである。南島の一番大きい町クライストチャーチへ行くため海岸沿いを走る列車の旅を楽しもうと調べたところどうしてもバスしか出てこない。その理由が解ったのはウェリントンからフェリーでピクトンという南島のバスや列車、船の起点となる小さな町へ渡った時であった。駅が閉鎖されていて、それは昨年 11 月に起きた地震で線路が塞がっているためであり、バスも内陸の方へ遠回りするようになったということであった。更に驚いたのはその後のことで、バスがクライストチャーチに入った時に見えた風景は、多くの廃墟となったビルと空き地であった。2011 年東北大震災の 20 日ほど前に起きた地震によるもので町の回復は少ししか進んでいないためであった。

そして、地震で壊れていたため臨時に建てられた聖公会のカテドラル教会(大聖堂)の主日礼拝に出席した時にとても素敵な出会いがあった。聖歌隊の賛美や礼拝で使われている言葉が英語だけでなく初めて聞く言葉が並行して使われていたのである。それはマオリ族の言葉であった。後で調べて分かったことであるが人口の 4.1%しかいないマオリ族の言葉が英語と共に公用語になっていて、国章にも白人の女性とマオリの男性が描かれている。しかもホテルのテレビで見た番組には少なくとも子供と大人向けの二つのチャンネルがマオリ語のものであった。

この旅でとても残念に思うのは旅先の二つの国の旗に記されている南十字星を見つけられなかったことである。星を見るため夜中に山へ登ったこともあり、田舎の暗闇では夜空を見上げるのを忘れなかったのに確認できず、とても残念。メルボルンでホテルの前に町で一番大きい駅があり、その駅に「南十字星駅」(Southern Cross Station)という素敵な名前が付けられていたのがせめての慰めかな。

気候は冬と言われていたが日本の春先のような気候で君子欄や紫木蓮の花が街のあっちこっちで咲いているのが見かけられる。天候にも恵まれ、移動の時とクライストチャーチでの数日間を除いて殆ど晴れの日であった。

今回の旅の形態はあんまり予定を組まないこととなるべく歩いたことである。それは自分で旅のどこまで瞬時の対応ができるかという新しい試みで旅を楽しむためでもあった。ニュージーランドへ渡るのを最終的に決めたのはシドニーに行ってからのことである。シドニーを除いて一つの町の滞在は大体 4 日前後であったが、クライストチャーチの他はウォーターフロントを囲む形で中心街が発達し、端から端を日に何度も歩ける広さで、町を見るだけなら長く滞在する必要がない点もあった。自分のスマートフォンの計測器で歩いた総距離や歩数を見ると、約 390 ㎞を歩き、移動に使われた日を除くと 1 日平均 2 万 7 千歩以上歩いている。心身が疲れた時に街角で飲むコーヒーや紅茶はとても美味しく元気づけてくれた。旧友にも会え、新しい経験や多くの学びのある旅であった。

（第 214 号・2017. 9. 17.）